慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	政治学者 内山秀夫先生
Sub Title	
Author	小野, 修三(Ono, Shuzo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.3 (2009. 3) ,p.147- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 内山秀夫先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20090328-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

えであった。研究者よりは大学の経営に私の適性があると判断されたのかもしれない。学長の任期が終わった三年後、学長候補になったのだが、自分の研究をまとめたいという理由で候補を辞退した。その報告を先生にしたら、既述の「妙に力まないように」という葉書をいただいた。内山先生にその意味をお聞きしたいと思いながら、とうとうそのままになってしまった。

広島修道大学教授　市　川　太　一

政治学者　内山秀夫先生

入学時に新一年生に配布される『塾生案内』が改題され、今日カラムス・グラディオ・フォルティオルと呼ばれているその冊子の一九九〇―九二年度版の巻頭に内山先生の「福澤先生という人」が掲載されている。

福澤先生を「人」と呼び、「書を捨てよ」と書き出される内山先生の新入生へのオリエンテーションの言葉に導かれて進路を決めていった塾生がどれほどいたのかを今確かめることは出来ないが、少なくとも内山先生にはそのオリエンテーション役が委ねられていた。私は当時内山先生御自身が名実ともに慶應義塾を一身に担う今というものを自覚されていたことを証言出来る者の一人であり、先生は続いてその全精力を新大学の設立に向けられることとなった。

新潟国際情報大学初代学長としての内山先生については、その創設以来先生を支えられた石川真澄氏などからお話が伺えれば一番良いと思えるが、残念ながらその石

川氏も数年前に鬼籍に入られた。学長職を終え一九九八年東京に戻られてからの内山先生は、東京都民カレッジで市民講座を担当されたりする一方で、知的活動のレファレンスを日本の近現代史に求められ、二〇〇一年にはまずヒュー・バイアス著『敵国日本』（原書一九四二年）を翻訳された。

以後毎年一冊ほどの勢いで翻訳また『與謝野晶子評論著作集』（二〇〇三年）の編集・解題の仕事を続けられた。そうした活動のなかで、私は先生が二〇〇六年に日本経済評論社から『増補 民族の基層』を出版されたことが「『いま現在』人間がおかれている《歴史的現実》と直接格闘」（前記「福澤先生という人」）する政治学者としての先生御自身の意思表明として、強く印象に残っている。

一九八三年に三嶺書房から出版された初版の『民族の基層』には、琉球大学で政治学原論の集中講義をされたことを契機として、また色川大吉氏、石田雄氏らと共に行なった不知火海調査を契機として執筆された沖縄、水俣に係る主として一九七〇年代に執筆された文章が収録され、さらに書名と同じ「民族の基層」との論文（『世界』一九八二年一月号）が収録されていた。この初版に収録された「民族の基層」と増補版に収録された「民族再考」（『法学研究』一九八四年一月号）との間には、発表時期では二年間ほどの時間の開きがあるだけだが、内容的には大きな質的な変化が見られるように思う。

一九七〇年代の半ば指導教授の内山先生がわれわれ大学院生が国家という言葉で議論しているなかで、M君だけが統治という言葉を使った際、そのM君を「それが政治学だ」と褒められたことを覚えている。国家という言葉で議論していた自分たちをひどく恥じたわけだが、『増補 民族の基層』に収録された「民族再考」のなかで先生は統治とか政府ではなく、国家というキーワードによって「人間の営為の先端にとりつくことが」出来るのだ、と語っておられる。

「国家問題は、私には、戦後史の未完の問題として持続しているとしか思えない。そして、国家問題は、人間の自由に表明する意志及び希望の次元として、現在、もう一つの時期をむかえているのではないか。さらに、それは、あるいは、戦後世界が構想された時の国家とは、まったく異質の位相を人間史にもちこもうとしているの

ではないか」、と。

民主主義が制度化され、「政府」理論となる時、「『理性』そのものが問われることのない合理性に貫徹されることになる」。この抗うべき対象としての「政府」理論に対して、「国民に接合する民族」を持ち出せば、「たちまちにしてその営為は国家に吸いあげられてしまう」のであり、その方向性を断ち切る道として、エスニシティに拠って立つ多元的社会の確立を主張される。

その限りで先生の論文は先生が語られる通り「現代世界にあって流動している人間の状況を、《社会》との関連で切ろうと試みた」もの、つまり「社会」を問題とするものであった。そうした議論は既に初版の『民族の基層』で読むことが出来るが、そこから翻って「社会」を問題にすることが「民族」へ、「国家」へと作用してゆく側面が増補版では「現行の国民形成の原理としての〝民族〟の意味内容の転換をはかることで、国民の形質を転換し、ひいては国家の規定者としての個人を確定する」という〝歴史的現実〟との格闘に挑む姿勢として、鮮明に語られることになる。

同じく『増補 民族の基層』では金石範著『「在日」の思想』の書評のなかで、「民族は、かくて私たちの現在を歴史の創造に結ぶ、連結環の位置にある」と述べておられる。国家とその国家を満たす国民、民族を議論することで「現在」と「歴史」を結ばんとする、先生の「人間の営為の先端」への執念は、先生のゼミから多くの優秀なジャーナリストが輩出していることと無縁ではないように思える。

内山先生は、先生のお嫌いな言葉であった弟子たち、その弟子たちからは最後まで「こわい」存在であった。その「こわさ」は、教師たることにこだわり続けた先生ゆえのものだったと思う。追悼文としては誠に異例のものとなったかも知れないが、内山ゼミ三期生の一証言として拙文を御霊前に捧げたいと思う。

商学部教授　小　野　修　三